

# 感染症の歴史に学ぶ

たかおか歴史探訪の取材から

2021/2/5（金） 元北日本新聞社高岡支社長 中島 利明氏 ゲストスピーチより

昨年5、6、7月と三か月にわたって「まいたうん TAKAOKA」（北日本新聞サービスセンター高岡本社発行）の連載「たかおか歴史探訪」で感染症のことを取り上げました。その取材をもとに、高岡が現場になった感染症についてお話しします。

まず「コレラ」です。戸出大仏と言うのが、高岡市戸出町の旧の町並みの角にあります。高さ2mあまりの石仏で、今も自由に戸を開けて見られるようになっています。江戸時代の終わり頃にコレラが流行して多数の死者が出ました。特に子供たちがたくさん亡くなったので、その霊を弔うために作ったということです。江戸時代の感染症は「疫病神の仕業」とされ、原因も分からないし、治療法もよく分からない。いったい何人が亡くなったのかという統計もなかった時代です。今でいう「公衆衛生」が全くなかったということです。そんな公衆衛生の夜明け前に、高岡に伝染病（感染症）の現場がどれだけあるのかと訪ね歩いたのがこの3回の連載です。

戸出大仏は阿弥陀如来像なんですけど、地元では子供たちが亡くなっているのので地蔵祭りで8月25日くらいに「疫病退散」の願いを込めて慰霊祭がずっと行われてきました。ところが昨年初めから始まったコロナの影響で全国的にほとんどの行事やイベントが「三密」を避けるためにと軒並み中止になりましたよね。その流れで、主催する自治会もやめるという話になりました。

個人的には「せっかく先人たちが仏像まで造って毎年『疫病退散』を祈願してきたのだから、中止では先祖に申し開きができない、感染予防策を万全にして続けるべきだ」とある役員に訴えました。その願いが通じたのか、結局、子供たちを呼ばないで、とりあえず役員だけの慰霊祭を執り行い、後世につないだと後で聞かせてもらいました。

これ（上二上の慰霊碑）は、やはりコレラで亡くなった相撲兄弟の顕彰碑です。二上と守山の境目に日露戦争の記念碑の横と並んで建立されています。苔が生えて文面が読めないほどに風化しつつあります。感染症にかかわる慰霊碑は旧市内に見当たらず、後で合併した周辺の戸出地区とかこの二上地区で残っている程度です。

コレラの感染被害はどうだったのか。明治12年、近代になってからの一番大きな流行の拡大ですが、当時はまだ富山県は石川県だった。大石川県としては死者21,144人、

患者数29,000人。これは全国で一番多かったそうです。今の東京みたいな感染爆発だったわけです。当時、原因も治療法もよく分からない。今から見れば、脱水症状で皆さん亡くなっていくのだから、水を体内に戻せばいいという治療法がよく分からなかったのです。

その時の発生源はどこか。まだ帆船から汽船へと船が近代化していく。そんな切り替わりの時期だったのですが、その時の乗組員たちが伏木の出身だったり、富山県の沿岸の町出身だったりして、彼らが陸上へ広がって感染が広がった。呼吸器疾患と消化器疾患の違いはあれ、まさに今回の日本でのコロナ禍の発端、ダイヤモンドクルーズ号と同じような三密状態が原因だったということです。

次は「天然痘」です。当時は「痘瘡（とうそう）」と呼ばれました。仏教伝来の時代にアジアからもたらされた伝染病なのですが、日本に定着して、風土病みたいに思われていた病気です。

ジェンナーと言う人が種痘というワクチンを考え出しました。体内に菌を入れて抗体を作っていくという予防法です。その種痘の種は日本には江戸とか、長崎とか大阪あたりに海外から早く届いたようですが、北陸は地方でありながら、特別なところでした。それは高岡の町医者的人的ネットワークのおかげです。

これまでの通説では黒川良安さん。上市出身の方で今の金沢大学医学部の前身の学校を作った方です。江戸時代末期の加賀藩の藩医だった人です。この人が嘉永三（1850）年二月に種苗を初めて手に入れて息子さんに北陸で初めて接種したというのが通説ですが、実は富山に正橋剛さんという精神科のお医者さんが医学史の研究をされていて、その論文には、高岡の町医者のほうが黒川さんよりもおそらく1か月余り早く種苗を受け取っていると書かれているのです。

その人は高岡最古の町医家である佐渡家の長男で8代目佐渡養順（ようじゅん）さんなんです。この人と次男の坪井信良（しんりょう）さんによる連携プレーで北陸初の種痘入手を成し遂げたのです。次男の信良さんは江戸の蘭学医の養子に入って、オランダ医学や西洋医学を学んで徳川家に雇われ、最後の将軍徳川慶喜の侍医になりました。慶喜の側にいるので幕末の幕府側の動きをすべて身近に見聞きしており、兄の養順と手紙のやり取りをして、高岡にも幕末の江戸のリアルタイムの情報が届いていたそうです。それほど太いパイプでつながり、坪井さんから、お兄さんのところへ種痘の種が届けられたというわけです。ただ、どうやって実施したのか、結果の史料は、まだ見つかっていません。

最後は、スペイン風邪です。今のコロナウイルスに一番良く似たパターンですけど、鳥インフルエンザの変異種、世にいう「Aソ連型」です。スペイン風邪、実はアメリカが発生源で、スペインに押し付けたみたいな話として聞いています。

この女学生がマスクをしている写真は実は、富山県警の歴史的資料に出ています。なん

で富山県警がこんな写真を持っているのかと思うと、当時内務省の下に警務局があって、今なら厚生労働省の仕事、つまり医療機関の管理監督を全部警察がやっていたのです。

日本でコロナ騒動が始まった去年の春頃ですか。日本の感染者や死者が欧米から比べると少ない理由について巷でいろんな意見がありました。人種のDNAの問題もあるかもしれませんが、日本には昔から手洗いやマスクの習慣がずっとあったからだ、といったような誤解をされている部分がありますが、実は、マスク着用の習慣はこのスペイン風邪の大流行から始まっているわけです。もちろん明治時代、ヨーロッパから欧米から来た外交官たちが横浜で、みんな手を洗っていない、うがいもしていないのは不衛生だと、当時の権令（ごんれい、県知事）に申し入れています。

川の水を飲み水にしたり、洗濯などにも使っていた時代で、上下水道が本格的に整備されるのは昭和に入ってからです。日本だけが衛生観念が進んでいたというのは明らかに間違いで、女学生たちがマスクを一斉に着用している風景はほんの100年ほど前から始まった風景なのです。

高岡には回生病院と言うのがありました。明治の伝染病予防心得書が明治13（1880）年に出来て、コレラ、腸チフス、赤痢などの伝染病が初めて指定され、感染者を隔離・治療するという公衆衛生の考え方が初めて導入されました。それから十数年たって高岡にもようやく市の事業として隔離病院ができたのです。

場所は白銀町にありました。当時、このような病院がどう地元から受け止められたのかは分かりませんが、しばらくして開発本町に移りました。回生と言うのは、死にかかっていたものを蘇らせるという「起死回生」から来ています。

当時、隔離する病院のことは「避病院」と言われました。東京弁では「シ（死）病院」と呼ぶので、最初は忌み嫌われたそうです。『高岡市史』には、在宅療養と病院で治療を受けた人の結果が載っており、病院に行った患者たちのほうが明らかに回復しており、その効果が立証されたとありました。

砺波地方の農村部と比べると、伝染病の死者の慰霊碑は高岡が圧倒的に少ないです。都市計画が進んで壊されたり、移転したりして、所在不明になったものもあるかもしれませんが、やはり、農村部の方が信仰心が強い。今もそういう気持ちが残っている。心から「疫病神」を恐れるというか、そういう素朴な信仰心が慰霊碑になって残っているのではないかと見られています。

新聞社で「天地人」を担当していた平成10（1998）年1月に書いたコラムがあります。21世紀まであと3年を残す時でした。報知新聞社の「二十世紀の予言」と題する論説を題材に取り上げました。明治34（1901）年から見て100年後がどうなっているか予測しています。報知新聞の夢を100年後の「天地人」が検証した形です。

<東京一神戸間が2時間半で行ける>とか、<無線電信で色の付いた映像が送受信でき

る>などという夢は実現したものの、<家屋、道路の建設は地震の被害を受けないほど堅固に>、は阪神淡路大震災、東日本大震災の発生で実現できていませんし、<衛生事業は進歩も>もその後のスペイン風邪や病原性大腸菌などで悲しい結果になっています。

報知新聞の論説は、科学技術万能の立場で「21世紀は奇異の時代」になると予言しましたが、それをほぼ一世紀後に引き継いだ「天地人」の結びは<通信の発達、遺伝子操作などの行方も心配。人間が自然の一部であることをしっかり認識しないと、21世紀(2001年1月)からは不気味な時代になる>と書きました。新型コロナウイルスに関しては残念ながら、「天地人」の予言が当たってしまったということです。

高岡だけの取材で、コロナの実態や問題点を全部、推論するのは難しく、あとは個人の考えとか、資料の中から引用したりしたものの一部を紹介します。

新型コロナウイルスによるパンデミックは「グローバル資本主義の破たん」をもたらしました。効率・利益・開発優先主義の考え方は直す必要があるのではないかと思います。科学技術万能の考えには日本人の多くもやはり懐疑的で、神を恐れ自然への畏敬の念が復活したのかなと思わせるほどに、今年之初詣では「コロナ退散」を多くの国民が真剣に祈りましたし、「妖怪アマビエ」が2020年の流行語大賞に入りました。富山の霊獣「クタベ」にもスポットが当たりました。

医療現場では人手が足りないなど、効率優先、利益優先の今の医療体制にはいろいろなほころびが見えてきました。毎日、テレビや新聞を見ていると、国民意識の劣化という人間の劣化というか、意識のモラルの低下も心配になります。

例えば、国民の指導する立場の閣僚や国会議員たちが国民の自粛を呼び掛ける立場なのに、緊急事態宣言が出されているにもかかわらず、飲み歩いたりして週刊誌で次々と叩かれる。また、これはもう論外ですけど、近所で感染者が出たときに移転を余儀なくなった家もあると聞きました。日本の国と言うそのものが、同調圧力が強い国だから何か強制力を伴わなくても一斉に同じことをするというのはあって、それと同じ動きをしない人、結果的に感染者になった人をネットで糾弾するとか、とても怖い社会になっています。

テレビやSNSの影響が大きいんだろうなと思います。最近、テレビを見ることが多いんですが、まさに「印象のメディア」で、これでもか、これでもかと首切りや倒産の話題が流されるなど、お先真っ暗の気分になって落ち込みます。

待て待て、新聞をじっくり見て、読みながら、自分の頭で考えると、「正しく恐れる」というか、少し冷静さを取り戻せます。感染者に対する嫌がらせと言うか、自己中心的で、その辺、もっと想像する力と言うか、我々もひよっとしたら加害者になるんじゃないかと相手の立場になってものを考えることが必要だと感じます。

東京一極集中もグローバル資本主義の一断面だと思います。国が推奨するテレワークだと、安全性が高い地方にとってチャンスではないかと思います。インターネットを使って

仕事するという形の仕事の仕方だと、必ずしも東京にいなくても、自然豊かで食べ物がいしく「三密」になりにくい地方で生き生きと暮らせます。今、地方の首長が盛んに発言し始めています。こうなると競争みたいな感じですね。

そこで東京や大阪の人たちが真剣にコロナ時代を生きるために新たな場所を求めようとすると、やっぱり地方同士の魅力発信の競争となります。高岡の場合だと、歴史都市であるとか、高岡の文化とか、住環境の良さとかをきちんとアピールしなければなりませんし、さらにその良さを磨き上げる必要があります。

私の好きな言葉は「身土不二」「他力本願」「即天去私」の三つです。やるべきことを精一杯やって天命を待つ。互いに信頼のもてる確かな人間関係の中で安心して暮らす。子どもたちものびのびと育つ。コロナ禍をきっかけに、みなさんが立ち止まって社会のありようを今一度考え直す必要があるのではないかと思っています。

ご清聴、ありがとうございました。